

恵比寿信仰の地域的展開

— 近世のエビス講を中心に —

谷 口 貢

一、はじめに

恵比寿信仰をめぐる研究は、これまでさまざまな視角から行われてきた。そうした研究の大筋は、主要な論稿を集成した民衆宗教史叢書の北見俊夫編『恵比寿信仰』（雄山閣出版、一九九〇年）や宮本袈裟雄編『福神信仰』（同上、一九八七年）、そして神仏信仰事典シリーズの吉井良隆編『えびす信仰事典』（戎光祥出版、一九九九年）や宮田登編『七福神信仰事典』（同上、一九九八年）などたどることができる。従来の恵比寿信仰研究は、次のような諸点に注がれてきたといえる。

まず第一は、恵比寿信仰の根元をなすエビス神の起源を解明しようとするものである。エビスという言葉には、これまで夷・戎・蛭子・恵比寿・恵比須などの漢字が当てられてきた。夷・戎は異郷や異国人を意味し、蛭子はイザナギ・イザナミ二神の間に最初に産まれたヒルコ（蛭子）が、三歳になっても足が立たなかったので舟に乗せて流されたという記紀神話に由来している。おそらくエビス神の原初的な信仰は、異郷から訪れる荒々しい霊力をもった神といった性格を強くもっていたと思われるが、中世以後、エビス神が記紀神話の蛭子神や事代主神と結びつけて尊崇されるようになり、さらに福德をもたらす神としての性格を強めることによって、恵比寿・恵比須として示されるようになっていったのである。

第二は、エビス神を祭神として祀り、恵比寿信仰の拠点を形成してきた兵庫県西宮市の西宮神社や大阪市浪速区の今宮戎神社をはじめ、各地の恵比寿信仰のセンター的役割を果たしてきた神社の成立と展開を究明しようとするものである。なかでも西宮神社は、蛭見大神を祀り、海から漂着した寄り神伝承をもつ神社で、正月十日には「十日戎」が催されてきた。そして、近世前期の寛文年間（一六六一～一六七三）の社殿の再造営を機に、エビス像の神札を各地に配札するようになり、とくに東海道筋・関東・磐城・岩代・羽前・信濃・越後・佐渡方面に信仰圏を広げ、その影響は今日に及んでいる。²⁾

第三は、福神としての恵比寿信仰の研究である。エビスの神像や絵像が、風折烏帽子をかぶる福々しい男が釣竿を持ち、釣り上げた鯛を脇に抱える姿で表現されてきたように、福神としてのエビスは豊漁をもたらす漁業神としての性格を強くもっているといえる。漁業神といえば、九州南部の漁村で海底から拾い上げてきた石をエビス神の御神体として祀る例や、魚群を伴って回遊する鯨などをエビスと呼ぶ例、あるいは漂流する死体をエビスと称し、これを手厚く葬ると豊漁になるといった例などにみられるように、エビス神には海のかなたから訪れる来訪神的性格が強くみられるのである。そうしたエビス神が、海と里との交易が行われる市を媒介にして、商売繁昌をもたらす商業神として発展していった。さらに、商業神や漁業神としてのエビス神が農村社会に受容されると、家を守護する屋内神として祀られたり、田の神信仰と習合して豊作をもたらす農業神として展開していったのである。このようにエビス神は、漁業、商業、農業などの生業に繁栄をもたらす神として信仰されてきたといえる。エビス神を含めた七福神の成立は室町時代といわれ、七福神の大黒天・恵比寿・毘沙門天・弁財天・福祿寿・寿老人・布袋といった組み合わせが固定するのは江戸時代の初期といわれる。また、エビス神と大黒天の二神を併祀するかたちも、室町時代以降に広くみられるようになったものである。

第四は、各地のエビス講と呼ばれる民俗行事の研究である。エビス講は主に商家や農家で行われ、商家では商売繁昌を祈願し、農家では豊作を祈願する行事になっている。エビス講の「講」は祭りの意味である。一月二十日と十月二十日の春秋二回、もしくはどちらか一回行われる。秋のエビス講を十一月や十二月にずらしているところもある。こうした日取りの間

題をはじめ、エビス神に供えるエビス膳や二股大根などの供物、春に稼ぎに出て秋に帰ってくるというエビス神の去来伝承、エビス神は目が悪く、耳が遠いなどの不具神伝承、出雲信仰との関連で神無月に神々が出雲へ出かけている間、エビス神が留守神をつとめるという伝承、そして商家の誓文払いの行事など、エビス講の行事をめぐる伝承は多様である。

第五は、恵比寿信仰を各地に伝播させる役割を担ったエビス回しとかエビス舞といった民俗芸能の研究である。エビス回しは、兵庫県の西宮神社に所属してした芸能集団の傀儡師が、エビスの人形を舞わせて門付けを行つたことに始まるといわれる。江戸時代に近畿地方を中心に活動し、エビス神のお札を配つたりしたのである。こうした祝福芸としてのエビス舞は、各地へ伝播して神事芸能などに取り込まれていったのである。

こうした恵比寿信仰の多様な研究成果をふまえながら、本稿では第四に挙げたエビス講をめぐる問題について考察を行うことにしたい。まず近世のエビス講に関する記載のある文献を検討して、江戸と大坂の違いをみるとともに、近世後期に実施された風俗調査（風俗問状）に対する回答書『諸國風俗問状答』に記載されている各地のエビス講の特徴を明らかにしていきたい。

二、近世のエビス講 ― 江戸と大坂 ―

エビス講の歴史は、中世にさかのぼることができ、商人が結成していた同業組合を中心に行われたのが始まりであるといわれる。宮田登氏によると、「信長の清洲城下町の商人頭が尾張・美濃両国の商人を支配したが、その傘下にあるのを、夷子講と称していた」例や、「越前河野浦山内の馬借がある時期を選んで戎講を催し、その際重要事件を協議した例」などがあるという⁽³⁾。こうした商人のエビス講は、近世に入って商業が盛んになると、江戸や大坂で広がっていったのである。

近世のエビス講に関する資料を博搜した長沢利明氏によると、元禄（一六八八―一七〇四）以降の様々な文献史料の中に

エビス講の記載がみられるようになるという。⁽⁴⁾たとえば、町人社会を描いた井原西鶴の『日本永代蔵』は元禄に入る直前の貞享五（一六八八）年に刊行され、作品の中でエビス講についてふれられているのをはじめ、名所案内記の『江戸惣鹿子』（元禄三年）には「十月廿日恵比須講、江戸中商人祝」とあり、同じく『国花万葉記』（元禄十年）には「十月廿日恵比須講、商家に是を営す」といった記述がみられるのである。

当時、すでに江戸と大坂のエビス講の異同について認識されていたようで、西鶴の作品にもそうした点をふまえて江戸と上方の商人気質の違いについて言及している。西鶴は『日本永代蔵』巻六の「見立てて養子が利発」で、江戸の町で銭見世（両替屋）を経営する子供のない夫婦が、エビス講の晩、尾頭付きの鯛を見て感激する伊勢出身の十四歳の奉公人の目の付け所に感心して、その男を養子に迎えて繁昌する話を書いている。江戸のエビス講の盛んな様子を、「年中の誓文を、十月二十日のえびす講にさらりとしたまふ事あり。その日は諸商人万事をやめて、我が分限に応じいろく魚鳥を調べ、一家あつまりて酒くみかはし、亭主作り機嫌に、下々いさみて小歌・浄瑠璃、江戸中の寺社・芝居、その外遊山所の繁昌なり。上方とちがひし事は、白銀は見えず一步の花をふらせける。秤いらずに、これ程よき物はなし。人みな大腹中にして、諸事買物大名風にやつて、見事なる所あり。」⁽⁵⁾と述べている。エビス講の御祝儀に一步金を派手にばらまく江戸町人の気前のよさを伝えている。エビス講の「誓文払い」とは、日頃商売上の駆け引きに嘘をついて客をだました罪滅ぼしと称して安売りをする行事で、主に上方で行われてきたが、江戸町人においても「年中の誓文を、十月二十日のえびす講にさらりとしたまふ」といった様子であった。

近世後期に編纂された風俗誌『守貞謾稿』（一八五三）によると、江戸と上方のエビス講の違いが明確に示されている。巻之二十六「春時」に、「正月十日 大坂南今宮村戎社詣 今日ヲ、俗二十日恵比須ト云。（中略）江戸、及び諸国ニテハ、十月二十日ヲ戎講ト号シ、諸商専ラ、祭之。大坂モ、十月廿日ヨリ祭ルト雖ドモ、呉服店ヲ専トシテ、其他ハ専ラ今日、此御神ヲ祭り、又、当社に群詣ス。商家ハ、男女老少交替シテ詣レ之。大約不参ヲ稀トス。」⁽⁶⁾とある。大坂では、正月十日の「十

日恵比須」に今宮戎神社へ参詣して賑わい、とくに商家では全員が交替で参詣することになっているという。それに対して、江戸や諸国では、十月二十日をエビス講といって、様々の業種の商家が祭りを行っている。大坂で十月二十日の祭りを行うのは、呉服店のみであるという。

さらに、『守貞謾稿』の卷之二十七「夏冬」をみると、「十月二十日 今日、京坂ニテ、誓文拂ト云。江戸ニテ、比恵寿講と云」とあり、上方の誓文払いに対して、江戸のエビス講がはっきりと対比されている。そして、「京坂ニテハ、唯、呉服、木綿、古着等、大小賈トモ、蛭子神ヲ祭り、家内モ祝レ之。又、今宮等ニ参詣ス。他商ニテハ、不祭祀者多シ。又、今日、呉服店等ニテ、専ラ小裁ヲ賣ル。」とあり、十月二十日の誓文払いを行うのは、呉服店などの衣料品を扱う商家が中心で、エビス神を祭り、今宮戎神社へも参詣するという。それに対して、「江戸ニテハ、正月十日ニ祭ラズ。諸商家トモニ、今日毎戸蛭子尊ヲ祀リ、親族及ビ賈道得意ノ輩ヲ會シテ宴スルコト、盛也シガ、天保以来、全ク廃セザレドモ、前年ニ及バズ。蓋シ、蛭子神ニ参詣スル所、無之。」という。江戸では、商家毎にエビス神を祭り、親族や顧客を招いて宴会を催すのである。しかし、天保年間以降、西鶴が『日本永代蔵』で伝えたような派手なエビス講はみられなくなったようである。おそらく、天保の改革（一八四一〜一八四三）による緊縮財政の影響によるものといえよう。

喜多村信節の『嬉遊笑覧』（一八三〇）の卷七には、「夷子講 商家十月二十日正月十日を（江戸にては正月も二十日なり）もて蛭子神を祭る」とある。⁽⁸⁾ エビス講の祭りは年二回であり、上方では正月十日と十月二十日であるのに対し、江戸では正月二十日と十月二十日に行っている。長沢利明氏は、享保二十年（一七三五）刊の江戸の地誌『続江戸砂子』に、「一月廿日恵比須講、諸商人これをいわふ、十月同事」といった記載があることから、江戸の商家で春秋二度のエビス講が行われるようになるのは、十八世紀の前期頃ではないかと推測している。⁽⁹⁾

江戸のエビス講の行事内容については、斎藤月岑の『東都歳時記』（一八三八）が少し詳しく述べている。正月二十日は「商家愛比壽講 愛比壽大黒二神を安じ、鯛魚の鮮けきを掬けて是を祭り、萬陪の利益貨殖を祈る。終夜親戚知己をむかへ

正月と十月で「ゑびす」と「夷」の表記が違っている理由は明らかではない。また、当時の暦はいわゆる旧暦（太陰太陽暦）を使用していたので、以下の月日は旧暦であることをあらかじめ断っておきたい。各地の『問状答』に記載されたエビス講について検討していくために、二十三種の『問状答』を次のように地方別および府県別に整理しておきたい。

東北地方

① 出羽國秋田領風俗問状答 …………… (秋田県Ⅰ)

② 六郡祭事記 …………… (秋田県Ⅱ)

③ 陸奥國信夫郡伊達郡風俗問状答 …………… (福島県Ⅰ)

④ 陸奥國白川領風俗問状答 …………… (福島県Ⅱ)

関東地方

⑤ 常陸國水戸領風俗問状答 …………… (茨城県)

北陸地方

⑥ 越後國長岡領風俗問状答 …………… (新潟県Ⅰ)

⑦ 北越月令 …………… (新潟県Ⅱ)

⑧ 若狭國小濱領風俗問状答 …………… (福井県)

東海地方

⑨ 三河國吉田領風俗問状答 …………… (愛知県)

近畿地方

⑩ 伊勢國白子領風俗問状答 …………… (三重県)

⑪ 近江國多羅尾村風俗問状答	(滋賀県)
⑫ 丹後國峯山領風俗問状答	(京都府)
⑬ 淡路國風俗問状答	(兵庫県Ⅰ)
⑭ 異本淡路國風俗問状答	(兵庫県Ⅱ)
⑮ 大和國高取領風俗問状答	(奈良県)
⑯ 紀伊國和歌山風俗問状答	(和歌山県)
中国地方		
⑰ 備後國福山領風俗問状答	(広島県Ⅰ)
⑱ 備後國深津郡本庄村風俗問状答	(広島県Ⅱ)
⑲ 備後國品治郡風俗問状答	(広島県Ⅲ)
⑳ 備後國沼隈郡浦崎村風俗問状答	(広島県Ⅳ)
四国地方		
㉑ 阿波國風俗問状答	(徳島県Ⅰ)
㉒ 阿波國高河原村風俗問状答	(徳島県Ⅱ)
九州地方		
㉓ 肥後國天草郡風俗問状答	(熊本県)

『問状答』に記載されたエビス講について、(1)祭日、(2)担い手、(3)供物と祀り方、(4)誓文払い、(5)民俗芸能、の順でみていくことにしたい。なお、エビス講の記載が全くない②秋田県Ⅱ、⑪滋賀県、⑭兵庫県Ⅱ、⑯和歌山県、㉒徳島県Ⅱの五種

については、以下の考察から除くことにしたい。

(1) 祭 日

エビス講が行われる祭日に注目すると、(a)十月二十日の秋のエビス講のみのところ、(b)正月二十日と十月二十日の春秋二度のエビス講が行われるところ、(c)エビス講が行われないところ、(d)その他、に分けることができる。

- (a) — ①秋田県Ⅰ、③福島県Ⅰ、⑥新潟県Ⅰ、⑦新潟県Ⅱ、⑧福井県、⑨愛知県、⑫京都府、⑬広島県Ⅱ、⑭広島県Ⅲ、⑮徳島県Ⅰ

- (b) — ④福島県Ⅱ、⑤茨城県、⑩三重県

- (c) — ⑮奈良県、⑯広島県Ⅳ、⑰熊本県

- (d) — ⑬兵庫県Ⅰ、⑰広島県Ⅰ

これからもわかるように、(a)のタイプが圧倒的に多く、エビス講が十月二十日の秋エビスとして形成され、それが各地に広がっていった様子をうかがわせるものである。⑥新潟県Ⅰには、正月二十日は「此日にはなし」としながらも、「若夷として祭るもあれど稀也」という但し書がある。同じく⑦新潟県Ⅱにも同様の記述がみられる。正月二十日の春エビスが受容されるきざしなのであろうか。なお、⑦新潟県Ⅱには十月の「夷講の日どり廿日たることは誰もしれども、強て其日を用ゆるはかりにもあらで、渡世の隙をうかがひ他日を用ゆることなり」とあり、⑥新潟県Ⅰにも同様の記述がみられる。

(b)の春秋二度のエビス講は、伊勢国（三重県）以東であり、(c)のエビス講が行われないところは大和国（奈良県）以西となっている。(d)のその他は、⑬兵庫県Ⅰをみると、春のエビス講は「定まれる日なし。多くは十日を用ゆ」とあり、秋の方は十月二十日で「商家には折々有」といった具合である。正月十日が多いのは、西宮神社の「十日戎」の影響によるものといえる。⑰広島県Ⅰは、一月二十日だけでなく「十日に仕候も有之」とあり、そして「五月、九・十月にも仕候」とある。十月二十日の項には、「正・五・九月祭り有之候故にや、此月の祭は仕候」となっている。

(2) 担い手

エビス講は都市部に広がっている行事であり、その担い手の中心は商人である。①秋田県Ⅰ「商家、貧富大小によらず、なべてする事に候。大家の仲仕なんどの多くいて入には、ことに祝ひ祭る」、⑦新潟県Ⅱ「此講をつとむるものおほく商家にかぎれり」、⑧福井県「商人いはひ候計」、⑨愛知県「商家にては饗応あり」、⑩三重県「商家にて、親屬^{ママ}懇意を招て饗応するのみ」、⑬兵庫県Ⅰ「商家には折々有」とある。

特定の業種を挙げているのは、⑫京都府「町方織屋都て商人向」、⑭徳島県Ⅰ「呉服屋」などである。また、⑥新潟県Ⅰは「工商の家のみに祭る」としており、①秋田県Ⅰでは「工商の戎講、その職々にて違ふ」とし、「鍛冶のはしんがと云、金ナ神の祭ながら、夷講と云て、別に夷講の祝ひはせず候。是はこの月「十月」の十七日にする。(中略)酒屋、紺屋はむろえびすと云、此月の五日にする」と述べている。このように出羽国秋田領では、恵比寿信仰が多様な職人層に浸透している様子がわかるのである。

都市と農村との対比を明確にしているものには、⑮広島県Ⅱ「村方にては態に祭り等も不仕候。町屋にては随分祭り等も御座候」、⑯広島県Ⅲ「在中此事無御座候。町屋賑々敷祭り申候」などがある。農村のエビス講について、⑰広島県Ⅰ「在方にて有之候へ共、略に御座候」、④福島県Ⅱ「街在共に初ゑひす講と申して、(中略)祝申候」、農家にては豪農にては祝ひ候者も有之候へども、行事と定め格別の儀も無之候」とある。『問状答』の記述からみるかぎり、エビス講の農村への普及はごく一部にとどまっていたということになるのである。

(3) 供物と祀り方

エビス講のときのエビス神への供物と祀り方についての記述も若干みられる。④福島県Ⅱでは、正月二十日は「あづき飯に大こん、牛房、いか、菰蓐、とうふ等の煮べに祝申候」とあり、十月二十日は「恵比壽へ供物は、神酒第一に鯛をそなへ、餅をそなへ、時の畑はつものなと色々相備申候」とある。⑫京都府では、十月二十日に「家内にて神酒上げ、小豆飯・田作

か鰯様の物大根に和し、召遣迄爲喰、其夜惣休に御座候」とある。また、⑭広島県Ⅲでは十月二十日に「廿日殿と申、神酒灯明など備祭り候」とか、⑨愛知県では十月二十日に「鱈など調じて祝ふ」といったことが述べられている。

⑥新潟県Ⅰと⑦新潟県Ⅱには、十月二十日のエビス講に生きた鮎を供えることが報告されている。⑥では「夷の神に御膳を供するに、生たる鮎を鉢に入れてそなへ、ことはて、川に放すも侍り」とあり、⑦もほぼ同様の内容である。このように生きた川魚をエビス神に供えることは、近年のエビス講にも見出せるものであり、エビス神の漁業神的性格を伝えている。エビス神の祀り方で、⑦新潟県Ⅱで「今按に所々に恵比須大夫といふものありて、夷の像をすりたるを町在家に配る。かれば大かたの家に皆あり。ゆゑに正月は恵比須棚といふをかざり置て、年徳神とひとしくなせる所もありときこゆ」と述べられている。越後国では、エビス像の神札を配る恵比須大夫の活躍がみられ、エビス棚を祀る習俗も形成されていたのである。

(4) 誓文払い

前述の『守貞謾稿』に紹介されている誓文払いと類似しているのは、⑭徳島県Ⅰの例である。十月の「二十日は蛭子を祭り、商用の人来れば酒肴にて饗応し申家も御座候。是を誓文拂といふ。又呉服屋に年分の小切ものを集置、此日夷切レと申賣得は、多く買人参申候」とある。

その他、⑥新潟県Ⅰの十月二十日の項に「工商の家のみに祭る、誓文はらひとみふ。親族ちなみたがひに招きあひ、酒もり祝ひ侍り」とあり、⑦新潟県Ⅱにも十月二十日の項に「誓文はらひとみふところもあり。親族ちなみ互に招きあひて酒耐賀祝す」とある。また、⑤茨城県の一月二十日の項に「千萬両とせりうるは大商の家にて、手代多き家にのみ行はる」としている。このように誓文払いは上方だけでなく、越後・常陸・阿波などにも広がっていたことが確認できるのである。

(5) 民俗芸能

民俗芸能のエビス回しについては、⑰広島県Ⅰの正月の「萬歳の類の事」に、「春駒・大黒舞・夷廻・猿曳・ささら摺・

四つ竹等、是はなき郷は他郷より参候て、大抵有之候」とある。また、②広島県Nの一月二十日の項に、エビス講はないが、「大こく・萬歳等の文句の歌をうたひ、物貰の類、當月中折々参り申候」とある。

こうした芸人に対して、エビス講に集まった人々がエビス舞などをする例がみられる。①秋田県Iの十月二十日の項には、「酒うち吞て、夜さらうたひ舞ふ事に候。身幸の舞と申事をし候。是は、みさいのく人と人々輪に居て、みな手をうち拍子とり囃す。その時、坐中の舞心得たるものたちて舞也。恵比壽舞、大黒舞等品々あり。別に定る調もなし。羅漢舞ことなるきためしなり。俗にらつか舞と云にて候」とある。エビス舞などが、エビス講の余興として行われていたのである。

四、おわりに

近世のエビス講は、都市を中心に商人層に広まっていたのであり、エビス神は大黒天とともに福神信仰の代表的な存在になっていたのである。江戸のエビス講は、維新を迎えて明治時代に入ると、どのようなようになっていったのであろうか。明治三十二年から三十五年にかけて刊行された平出鏗二郎の『東京風俗志』には、「夷子講」について次のように述べられている。

十月二十日には商家にて夷子講とて福德神なる夷子、大黒の祭を行ひて祝ふ。供物に掛鯛かけだいを供ふ。元来一月二十日との両度行ふことなりしが、一月のは今廃れぬ。特に下町辺の商家に盛にして、親戚知音を招きて祝宴を開き、これ等の客を始め、店の者などまで客衆に擬して、商の品物を千円、万円など、価高くつけしめて売買する式をなすなり。(中略)されども一般の上よりいへば、大阪の商家に行ふが如く盛ならず。その前夜、十九日の夜に、日本橋大伝馬町通、旅籠町にて、明日に用うる宮みや、夷子、大黒、掛鯛、浅漬大根などを売る市を開く、俗にべつたら市といふ。(中略)商人はこの市の景氣を以て明年の商況を占ふといへり。⁽¹⁵⁾

ここで伝えているのは、かつて正月二十日と十月二十日の二度行われていたエビス講のうち、正月の方が衰退してしまっ

たということである。また、エビス講の余興として行われた競り売りはみられるが、大阪の商家の方が盛んだというのである。中央区大伝馬町の宝田恵比寿神社の秋の大祭である十月十九日の宵宮祭と二十日の本祭に、ベッタラ漬けと呼ばれる浅漬けの大根を売るベッタラ市が立つのである。ベッタラ市は近世後期から続く行事で、今日まで続いている。このベッタラ市は、商家のエビス講に用いる供物を売る市が発展したものである。現在でも数百軒の夜店が出てにぎわうが、「この市の景気を以て明年の商況を占ふ」といった勢いがみられないのは、時代の流れといわなくてはならない。しかし、こうした行事の中に恵比寿信仰が息づいているのであり、地域社会の民間信仰に目をこらして見ると、今日においても様々なところで福德神としてのエビス神が祀られており、人々の信仰を集めているのを知ることができるのである。

(注)

- (1) 中山太郎はエビスジ(恵比須神)の起源について、蛭子尊説、事代主命説、彦火々出見尊説、蝦夷神説、鯨神説、などがあるとしている(中山太郎編『日本民俗学辞典(全)』パルトス社、一九八七年、合本復刊・正編、二八七―二八八頁)。
- (2) 編集部「えびす信仰と西宮神社」(吉井良隆編『えびす信仰事典』戎光祥出版、一九九九年、八二頁)。
- (3) 宮田登『近世の流行神』評論社、一九八六年、一一六頁。
- (4) 長沢利明「商人のエビス講とベッタラ市」(同『東京の民間信仰』三弥井書店、一九八九年、一〇六―一〇九頁)。
- (5) 井原西鶴『日本永代蔵』(谷脇理史・他校注・訳『井原西鶴③』新編日本古典文学全集六八〇小学館、一九九六年、一八六頁)。
- (6) 喜多川守貞『守貞謄稿』第四卷(朝倉治彦、柏川修一校訂編集)、東京堂出版、一九九二年、九〇頁。
- (7) 同右、一四二頁。
- (8) 喜多村信節『嬉遊笑覧』(日本随筆大成、別巻第九卷)、吉川弘文館、一九九六年、二六九頁。
- (9) 前掲(4)、一〇七頁。
- (10) 斎藤月岑『東都歳時記1』(朝倉治彦校注)、東洋文庫、平凡社、一九七〇年、一二四頁。
- (11) 斎藤月岑『東都歳時記3』(朝倉治彦校注)、東洋文庫、平凡社、一九七二年、二九頁。
- (12) 平山敏二郎(校注・解題)『諸國風俗問状答』(『日本庶民生活史料集成』第九卷、三一書房、一九六九年、四五三―八四三頁)。
- (13) 同右、平山氏の「註記」の八二九―八三〇頁、参照。
- (14) 同右、四五六・四五八頁。以下、『問状答』からの引用を脚注で示すのは煩雑になるので、すべて注(12)からの引用であることを明記しておきたい。
- (15) 平出鏗二郎『東京風俗志上』(ちくま学芸文庫)、筑摩書房、二〇〇〇年、二五六―二五八頁。